
原 著

宗族マウルにおける水利慣行
— 韓国忠清南道唐津郡宗族マウルの事例 —

林 在 圭* 矢 野 敬 生*

Irrigation System of "Jongjok Village" in Korea

Jaegyu Lim* and Takao Yano*

Abstract

This study clarifies the fundamental structure of a rural village in Korea through a feildwork of the practice and managment of the irrigation system in the village. In this study, an irrigation association in the "Jongjok-Maeul" (lineage village) was especially focused. The subject of investigation is the irrigathion is the irrigation association, which is "Sangdosurike" of a "Jongjok-Maeul" in Chungchong-Do Province.

The social relationship of the "Jongjok-Maeul" is composed based on two kinds of mediations such as land (localtiy) and "Munjung" (consanguinity). Those mediations are foundation for the social structure of "Jongjok-Maeul".

The Irrigation association shows such characteristice of the social structure remarkably and concretely. In conclusion, the cooperation in the village was weak, because the principle of "Munjung" strongly affected the social relationships of "Jongjok-Maeul"

*人間基礎科学科

*Department of basic human sciences

目次

はじめに

1. 桃李里マウルの概況—土地と社会関係をめぐ
る歴史的展開
2. ハルリドゥルと借地関係
 - (1) ハルリドゥルの特性
 - (2) 借地関係
3. 「上桃水利契」の成立・展開過程
 - (1) 上桃水利契の成立過程
 - (2) 上桃水利契の展開過程
4. 「上桃水利契」による水利慣行—とくに運営
過程をめぐって
 - (1) 上桃水利契の規約
 - (2) 上桃水利契における共同労働と水税
 - (3) 上桃水利契における配水
5. 「上桃水利契」の解体
むすびにかえて

はじめに

韓国の村落社会とりわけ宗族マウル^①に関する従来の研究は、主として「親族研究」に向けられてきた。そこでは、親族組織としての門中^{ソンジョン}がマウル(村)を超越する形で存在し、門中の原理が村を支配するところに、宗族マウルの特徴が見いだされてきた。この特徴は、とくに上下(上典・下人^{ハイン})関係・地主小作関係・班常^{ヤンバン}・常民^{サンミン})関係として提起されてきたといえる。

ところが、親族組織としての門中と村との関係に関してはほとんどこれまで論究されてこなかった。宗族マウルにおける村落社会の構造は、土地(地縁)を媒介として規定される社会関係と、門中(血縁)を媒介として規定される社会関係とが拮抗し、それが宗族マウルの社会構造を基礎づけている。すなわち、宗族マウルにおける村人の相互関係は、土地に対する権利・義務によって地主小作関係が形成され、一方では村人は門中の成員でもあるが故に、門中における序列によって位階関係が形成される。したがって、宗族マウルの基礎構造はこの二つの社会関係に基づいていると考えられる。

こうした宗族マウルにおける社会関係が具体的かつ顕著に現れる場面は、共同作業・共同利用慣行においてである。そこで本稿では、調査対象地

である韓国忠清南道唐津郡の宗族マウル・桃李里^{ドイリ}における「上桃水利契」という水利共同組織を取り上げ、とくに水利慣行や組織運営の実際を追うことで、韓国村落社会の基礎的な構造についてその一端を明らかにしたい。

ところで水利共同組織に関する従来の研究^②は、①「産米増殖計画」との関連で水利組合をみつかったものが多く、したがって同計画以降の水利慣行に関する研究は稀であり、とくに個別事例に関する分析的研究が欠けている。さらに②従来の研究関心は日本人の大地主を主体とする巨大な水利組合研究に傾斜しており(たとえば李榮薫・宮嶋博史他1992)、韓国人を主体とする小規模の水利共同組織に関してはほとんど解明されてこなかった。そこで本研究では、③韓国人を主体とする小規模の水利共同組織の成立から解体までの歴史的過程をふまえた分析をとおして、韓国的な特徴を明らかにすることをもうひとつのねらいとしている。この点でひとつは日本の水利慣行(たとえば、大澤・矢野1999)と対比した場合に顕著にみられる韓国的な特質—すなわち、ムラといった集団的な共同性の稀薄さとある種の個人主義的志向性—であり、もうひとつは親族理論との関連のなかで、典型的な父系出自集団を形成する韓国の門中組織における紐帯または結合力の表出の仕方である。

後者の視点では、たとえばキージングは出自集団の紐帯または結合力に関して、「分節同士の関係は、父系出自のハイアラキーに沿って想定されている」^③と述べている。すなわち、出自集団(門中)は本家(宗家)を中心に親疎関係により紐帯・団結がハイラルキーな構造をもつということを含意している。しかし、桃李里の門中においては、たとえば農地の貸借関係からみてもキージングがするような論理は妥当せず、サブリネージであるチバン間関係にはむしろ排他的な関係がみられる。また、ヌエルやティヴ族の父系出自集団を再考したサーリンズの「相補的対立、もしくは結集効果」⁽⁴⁾という視点から考えてみても、韓国的な特質はアフリカ型の出自集団の論理とは異なるものといえる。こうした観点から生業活動における門中のサブリネージであるチバン間関係についても、水利慣行や借地関係を通して論究したい。

1. 桃李里マウルの概況—土地と社会関係をめぐる歴史的展開

桃李里（行政里としては桃李里は1里と2里に分かれており、以下では特筆する必要がない限り桃李1里を桃李里と略称する）は、宜寧南氏忠壮公派門中の本抛地である。この村は武班両班の宗族マウルで、1996年調査当時66戸のうちの40戸余りが南氏一族で構成されている^⑤。村の家々は幾つかの谷筋に点在する数戸からなる散村形態をなしており、生業形態は水稻作を主として、タバコ・唐辛子・ダルレ（ニラ科）などの畑作を従とし、稲作・畑作の複合経営を展開してきた村である。

ここでは、調査研究対象村である桃李里が成立し、その後耕地が開発・展開されていく歴史的な過程をまず概観するとしよう。

桃李里の開発は17世紀に遡るが、宗族マウルとして成立されるのは18世紀以降とみられる。1663年に忠壮公派の派始祖である南以興將軍の殉国の忠節に対して与えられた「賜牌地」^⑥の一隅である「陽地便」^{ヤンジビョン}に宗家宅^⑦を構えたことが、桃李里が宜寧南氏忠壮公派の本抛地宗族マウルとして形成されていく契機となった。入村後、南氏一族は代々大宗家（総本家）を中心に在地両班^⑧として土地開発を押し進め、定住の基礎を作り、日帝時代（1910～1945）に至るまで耕地の拡大を図る一方で、その運営管理は大宗家の近親、とくに大宗家へ系子（養子）として入った生家の当主によって行われてきた。かつて桃李里における耕地の分布は『韓国地名総覧』によると、家々が点在する谷筋ごとに形成された棚田状の「畑地」10数ヶ所と「田地」1ヶ所である。ここでは畑地についての論述は省き、田地についてのみ論述する。というのは、高麗時代から「米布」を貨幣の替わりとして、また米を租税の対象としてきたために^⑨、水田は富の象徴として認知されてきたからである。

田地の1ヶ所は村のほぼ中央に位置し、細長い棚田形状をなしており、「ハルリドウル」（弓坪）と呼ばれる（図1）。水田地域を表す地名である「ドウル」という語彙が使われているのは、当マウル内ではこの1ヶ所のみであり、その面積は20

町余りである。

^{ハルリドウル}弓坪の水田は18世紀まで大宗家の権威の経済的基盤であり、大宗家がその所有権を持ち、近親の傍系親族が耕作権を担うという二重構造のもとで水田耕作経営が営まれてきた。その後、傍系親族による開墾・相続が行われ、各門中成員による水田耕作経営が展開された。ところが、日帝時代に入り、朝鮮総督府は「土地調査事業」（1910～1918）や「水利組合条令」（1906）および「国有未開墾地利用法」（1907）に基づき、近代的土地所有制度と近代的水利制度を導入した。土地調査事業は耕作者の届出による土地登記制度であったために、南氏一族は桃李里一帯の耕地をのぞいて、賜牌地の大半を喪失するという結果に至った。さらに、桃李里内の耕地に関しても自作地（小作人による営農）をのぞいて、土地の所有権が耕作者に移譲してしまった。とはいうものの、日帝時代の植民地行政は地主制を温存・利用し間接的な農民支配を行ったために、南氏一族にとってはある面ではこれまでの権威を保持しうる適切的な関係にあったものと思われる。1918年の日本本国における米騒動による食糧難を解決するために、韓国では「産米増殖計画」（1920～1939）が發布され、未開墾地・干拓地の開発と水利組合の創設が全国至るところで行われた。桃李里でも図1に示したように1930年代に干拓事業が着手されることになった。事業家と知られる日本人・片原栄治郎（当時京城府在中）が二人の韓国人黄〇〇（日本名尚本吉平）と金〇〇（日本名広山章太）を作業頭とし^⑩、桃李里の西北海上にあった「桃李島」（桃島ともいう）を中心に東西に堤防を築き、公有水面（干潟）を埋め立てて「^{シュクバツコル}艾原」と呼ばれる600マジギ（1マジギ=200坪）余りの水田からなる「片原農場」^⑪を造成した。それ以来、干潟に面していた桃李里は、一部を残してすっかり内陸に位置する村へと変貌することになった^⑫。その名残としてたとえば現在でも「^{ベツマウル}船村」という小地名が残っている^⑬。

「産米増殖計画」に歩調を合わせる形で干拓化によって造成された40町余りの片原農場は、1938年に新洞貯水池を農業用水（水源）とする「新洞水利組合」を組織し、干拓地造成工事当時の作業頭であった黄をその後も農場管理人として使い、小



写真1 「ハルリドゥル」の全景 (1999)



写真2 「ハルリドゥル」の耕地整理後の入水路

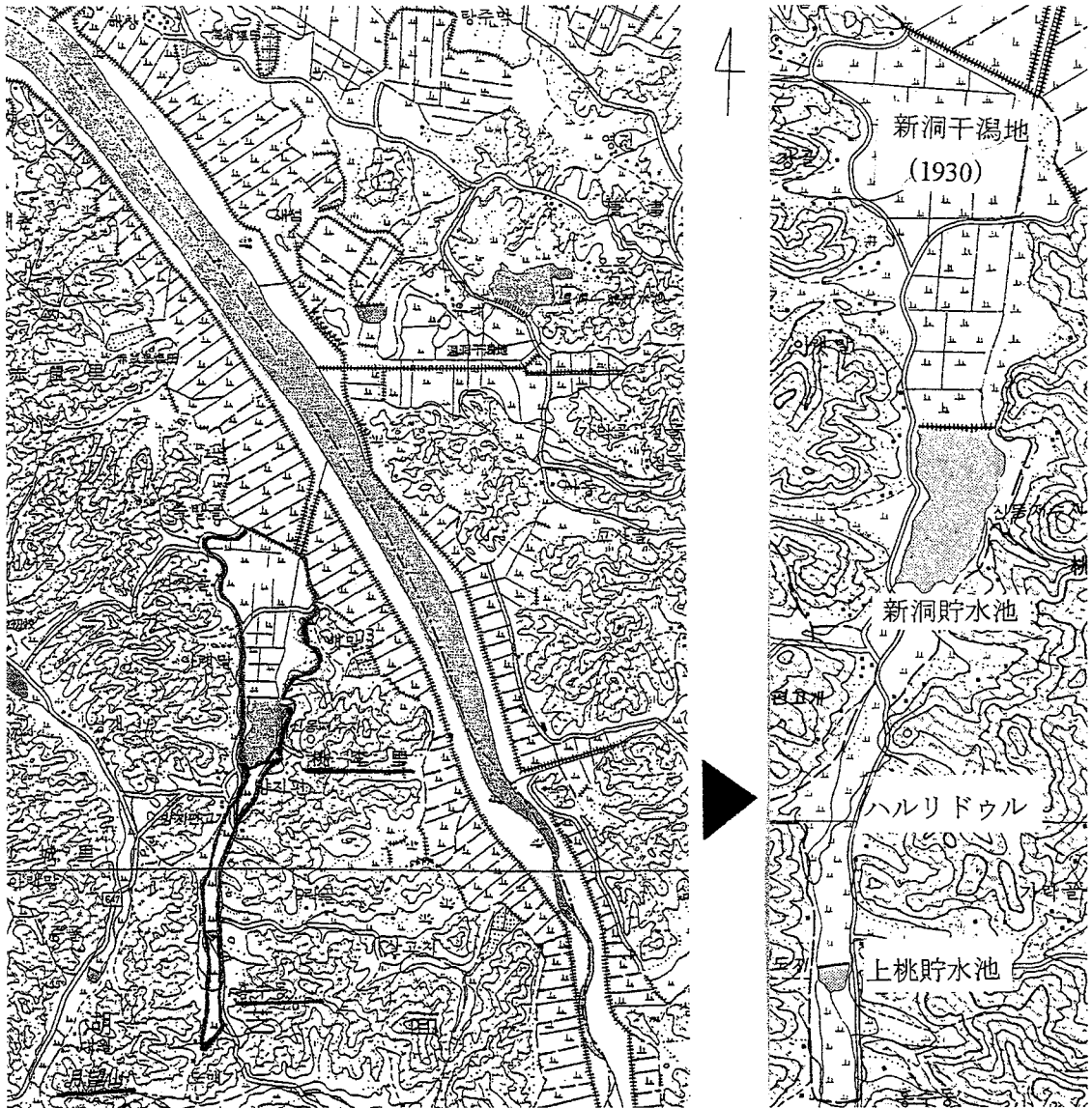


図1 桃李里マウルと「ハルリドウル」の位置

作営農が行われることになった（南氏の数人を含む）。やがて解放とともに片原は日本に引き揚げ、片原農場は1949年の農地改革によって、かつて小作人であった桃李2里の農民を中心に分配された。その後、片原農場はその名称を「新洞干潟地」（一般に「新洞」を省き、「ガンサジ（干潟地）」と呼ばれる）と改め、新たに水利共同組織「新洞水利契」が組織された。この新洞水利契に関しては稿を改めて論じたい。

解放後の農地改革は、「耕作者有田」の原則の下に、1949年6月農地改革法の制定、1950年3月

に改正法が公布され、これまでの地主制は崩壊した。南氏門中は農地改革によって大打撃を受ける結果となり、とりわけ大宗家においては農地改革法の「田畑所有限度最高3町」という制限によって田畑の多くを手放すことになった。逆に小作層であった村人にとっては自作農へと転化していく過程でもあった。

さらにもうひとつ南氏一族を苦境に追い込んだ出来事は6.25戦争（1950～1953）である。経済的基盤の危機的な状況をもたらしたのが農地改革であったとすれば、6.25戦争は地主と貧民との班

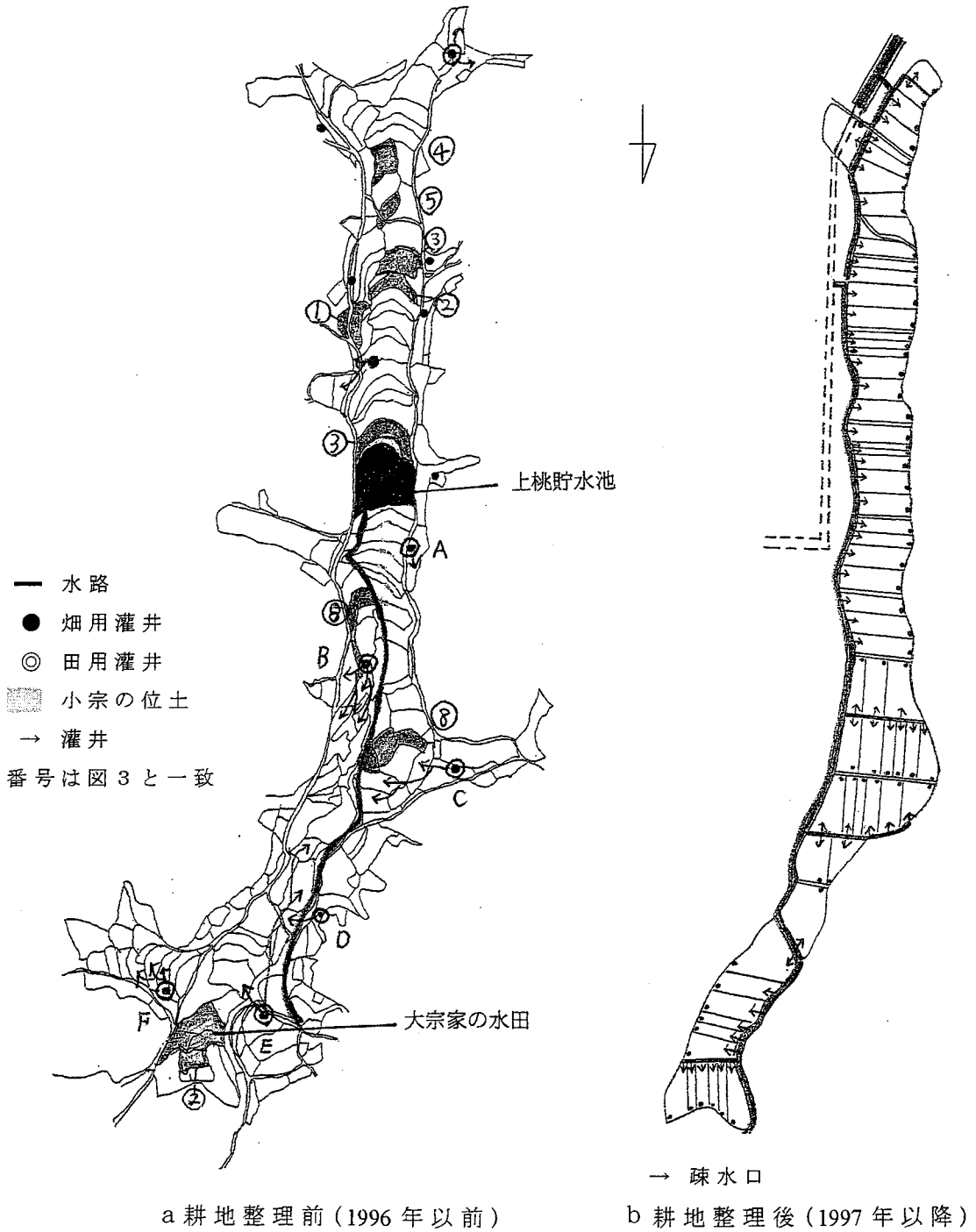


図2 「ハルリドウル」の景観

常関係が逆転するという伝統的な社会意識の崩壊をもたらした。身分制が廃止(1894年「甲午更張」)されてから久しいが、6.25戦争を契機として社会の底辺に綿々と受け継がれてきた調和的な関係(patron-client関係)は崩壊し、地主と貧農の身分的な逆転現象が起こり、班常関係は一掃されたといえよう。というよりはむしろ地主層が貧農層を待遇せざる得ないような状況に至ったといった方が正しいかも知れない。桃李里でも短い期間(3ヶ月)ではあったが共産主義の支配下におかれ、このことは桃李里における社会構造(とくに権力構造)が大きく変貌する契機となった。

1980年代に入ると、忠清南道の西北地域(桃李里も含まれる)では韓国で最も後発の大々的な干拓事業といわれる「大湖地区干拓事業」(1981.4～1995)が行われ、図1に示したように海岸線に沿って短冊状に整理された干拓地3700haと背後地4000ha(うち灌漑改善1760ha、干拓農地3700ha)が開発造成された。その干拓農地は1991年から周辺農民に1戸当たり2400～3000坪が一時耕作地として貸与され、その後1998年3月に各戸に分譲された(3年据置7年償還)。桃李里でも58戸の農家がこの分譲にあずかった。1996年調査当時の桃李里の個別平均水田所有面積は3160坪であったことを考えるとおおよそ耕地が2倍に拡大したことになる。

したがって、桃李里はそもそも村人にとって農村の意識が強かったにせよ、かつての半農半漁村であったマウルから、上述したように2回にわたる干拓事業によってすっかり純農村へと変貌するに至った。

2. ハルリドウルと借地関係

(1) ハルリドウルの特性

弓坪は桃李里のほぼ中央に位置し、月望山(海拔116m)と含鳳山(海拔120m)に挟まれた細長い傾斜地に開かれた水田地区である。弓坪は「大湖防潮堤事業」の一環として推進された「耕地整理事業」(1996年春～1997年春)によって、耕地整理が行われるまで農業機械も入らない程狭い100枚以上の棚田形状の水田からなっていた(図2-a)。

「弓が鳴る音が聞こえる野原」という意をもつ弓

坪は⁹⁰、かつては桃李里の中央に位置し、経済的にも農耕のうえからも最も条件の恵まれた地区であり、唯一水田開発可能な立地条件を備えた地区であった。

1996年現在、弓坪の水田所有の分布状況をみると(表1)、下から上の方へ向かって、大宗家の所有田を基点におおむね親疎によって徐々に上の方へと分布し、最も上方には他姓のものが所有する水田が位置していることがみてとれる。また、注目すべき点として門中のサブリネージである「小宗」あるいはチバン(あるいは堂内)⁹¹の共有財産である「位土」⁹²が弓坪に数ヶ所点在することである(図2と図3)。

こうした分布状況からして弓坪における水田開発は、年代の特定はできないにしても、大宗家を中心に南氏一族によって下から上の方へと行われたことが推測できる。こうした水田の開発は以下に述べるような諸条件に基礎づけられている。ひとつは、李朝期においては開発された水田は国有地であるか、あるいは一部の王族・官僚・豪族などに対して王朝から下賜され、彼らに所有権が認められたものであった。一方、こうした状況下では実際の耕作を行う農民は耕作権のみが与えられていた⁹³という。土地に関するこうした所有権と耕作権の交錯した慣習のもとでも、所有権と耕作権の分離は明確に存立していたが、新しい開墾地の開発過程においては開墾者に優先的に耕作権が認められてきた⁹⁴。水田の開墾を可能にする条件として宗家を中心とする門中の経済的・政治的な力が背景にあったであろうことは疑い得ないが、おそらく弓坪においては日帝期までは、宗家が所有権を有し、傍系や小作人が実際に耕作を行ってきたと考えられる。とくに両班階層は学問(儒学)に専念することこそが威信の源泉であり、「土」におりることを卑下し(農業のみならず、極端な場合には地面に接触することなくコシ等に乗って移動したように)、農業に関してはほとんど関心をもっていなかった⁹⁵。

さて、それではつぎに弓坪の水田における水の利用についてみることにしよう。戦前期までは月望山と含鳳山の谷水を用水にするほかは、雨水に頼る「天水畚」(天水田)であったから、水利の点からみると極めて不利な状況におかれていた。上

表1 ハルリドゥル水田の所有面積 (1996、単位：㎡)

姓別	面積	姓別	面積	姓別	面積	姓別	面積	姓別	面積
南1	2846	南14*	2423	南27*	3753	南40	8145	新契	1039
南2*	7242	南15	14032	南28	2251	南41*	3015	金1	2565
南3*	1711	南16	2093	南29	519	南42*	2119	金2*	1253
南4	3577	南17*	979	南30*	9	南43	11758	金3*	1217
南5	596	南18*	967	南31*	3567	宗承	3581	金4*	1240
南6	6623	南18*	3823	南32*	439	宗四	1171	文1*	2204
南7	7	南20*	129	南33*	14	宗松	5258	文2*	2250
南8*	1936	南21	16523	南34*	14053	宗水	5146	真*	136
南9	279	南22	2334	南35	4390	宗虞	3368	成*	4073
南10	3980	南23	42	南36*	1722	宗雲	3792	孫*	1952
南11	10348	南24	845	南37*	1343	宗宜	6767	農改*	1738
南12*	2375	南25	4538	南38	2621	宗忠	1223		
南13*	5649	南26	2702	南39*	3353	上契	9279		
総計	220922	〔南氏：201255 (位土：30306)、他姓：19667〕							
坪	66946			60986		9093			5960

*は所有者と耕作者が異なるものを表す

述したように、開田の進展に伴って用水の不足は一層加速したものとされる。このことは田圃のあちこちに現在する「プガン」の存在からも伺い知ることができる。プガンとは私有田に個人が専用として掘削した小さく浅い井戸である。これらのプガンは後に「灌井^{ゴァンジョン}」へと発展していくことになる(後述)。

したがって、弓坪の水田耕作農民にとって用水の確保は、常に付きまとう苦勞の種であった。とくに、弓坪は傾斜地(勾配5～10度)であるために、大雨が降れば田畑はおし流されてしまう。降水量の少ない年には水不足にみまわれ、旱魃被害が多発した。このため用水確保は常に不安定かつ切実な問題であり、旱魃の際には、しばしば「祈雨祭^{ギウゴ}」(雨乞い)の「告祀^{ゴゴサ}」⁹が行われた。旱魃は地方官吏の責任であるとみなされたから祈雨祭はしばしば地域または村をあげて挙行された。その他の旱魃に対する共同的な対処はほとんど行われず、あとは個々人の才覚にゆだねられてきた。上述したプガンや灌井の掘削はその代表的な対処法である。こうした危機に対する個人的な対応策は、日帝時代の近代的な水利組合の仕組みが導入

されるまで綿々と続けられてきた。

(2)借地関係

戦後(6.25戦争後)韓国では「小作」という言葉は使われなくなった。替わりに「耕作」という言葉に取って代わられた。桃李里における農地の貸借関係、とくに水田における貸し借りが盛んに行われている(表2)。表2に示したように、桃李里住民の全所有面積の6割弱の水田が貸借による耕作地である。戦後日本人農場であった2里の水田41458坪を除けば、その割合は非常に高いことがわかる。

桃李里における水田の貸借関係は、耕作料から類別すると、①チバン同士の貸借関係、②他人間の貸借関係、そして③特殊事情による貸借関係の3つのタイプに分けられる。耕作料は米による固定額の現物返済となっている。①のチバン同士の貸借関係は、高祖(4代上の祖)を共通の祖先とする子孫間に行われる耕作関係であり、耕作料は一般に200坪当たり米40kgの耕作料が支払われる。②の他人間の貸借関係の場合は、他人間はもちろん、チバンの範囲を超える門中成員間で行わ



れる場合も含まれるが、その耕作料は一般に200坪（1マジギ）当たり米80kg（1^{カマニ}）[㊦]となっている。③の特殊事情による貸借関係の場合は、上記のルール、すなわち他人間には1マジギ1^{カマニ}、チバン間には1マジギ半^{カマニ}のルールとは異なって低い耕作料が設定されている。とくに、①のタイプは主として位土の耕作であり、親代から高祖の代までの祭祀（忌祭祀）の費用を賄うためのものである。

出自集団の紐帯または結合力についてキーゼングは、前述したとおり「分節同士の関係は、父系出自のハイアラキーに沿って想定されている」[㊦]という。言い換えれば、出自集団（門中）は本家（宗家）を中心に親疎関係により紐帯・結合がハイラルキーな構造をもつということである。しかし、桃李里の忠壮公派門中においては、農地の貸借関係からはキーゼングという論理は妥当せず、門中のサブリネージであるチバンとチバンの間の関係は、上述したようにチバンの範囲をこえると、

水田の貸借関係において②のタイプに属することになる。いなむしろ他人に貸した方が、あるいは他人から借りた方が経済的な契約関係で済むので好ましいと考えるものも多い。表2の世番13はチバンをこえる門中成員から田畑を借用しているが、その小作料は200坪1マジギ当たり弱1^{カマニ}（80kg）である。一方、世番17はチバンの位土を借用しており、その小作料は200坪1マジギ当たり0.5^{カマニ}である。このようにチバンをこえる門中成員との貸借関係の場合は、経済的な契約関係のほかに親族関係が介在することになり、言いたいこともいえないので、こうした貸借関係を避ける傾向がみられる。したがってチバンの範囲をこえる門中成員間の関係、すなわちチバンとチバンとの関係はむしろ排他的な関係にあるといえよう。

そこでつぎに、利害関係が最も顕著に現れる水利共同組織を題材として、キーゼングの論理を検証してみたい。桃李里には日帝時代の1938年に日本人・干拓者によって組織された「新洞水利契」

表2 戸別農地所有と借用面積（1996、単位：坪）

世番	姓別	所有地		借用地		世番	姓別	所有地		借用地		世番	姓別	所有地		借用地	
		田	畑	田	畑			田	畑	田	畑			田	畑	田	畑
1	趙	4200	3000	0	3500	21	南	1000	1000	2000	1500	41	金	10000	600	3400	0
2	金	2000	700	0	0	22	金	0	0	0	300	42	南	5000	3000	5000	3000
3	南	2000	2000	0	0	23	金	1200	400	4000	0	43	南	4000	600	4000	350
4	南	1000	700	6500	800	24	南	5000	1000	0	0	44	金	0	0	1000	1000
5	柳	2000	1000	0	0	25	南	6000	3000	3600	0	45	崔	9600	500	900	0
6	南	2000	800	0	0	26	金	0	1500	0	0	46	南	0	40	1600	0
7	南	3600	1200	0	0	27	南	500	600	300	1000	47	金	0	300	4000	0
8	鄭	0	0	3000	1000	28	金	2600	4000	0	0	48	金	3500	2000	3400	800
9	南	2400	600	0	0	29	韓	0	800	0	0	49	南	3000	500	2400	0
10	南	8000	2200	0	0	30	金	2000	0	6000	0	50	金	3600	700	0	0
11	南	600	800	4600	0	31	金	375	2300	0	0	51	韓	5200	700	0	0
12	南	0	0	1200	0	32	南	0	1400	0	0	52	南	800	0	2400	0
13	南	0	1200	5200	1800	33	文	0	0	0	0	53	南	1200	1200	0	0
14	南	2000	700	0	0	34	南	3000	7000	0	0	54	南	800	800	0	0
15	金	40	0	0	0	35	金	2800	1000	3500	1500	55	文	2500	0	4600	2700
16	南	0	2000	0	0	36	南	0	0	0	0	56	南	3000	4000	0	0
17	南	1274	728	1346	0	37	南	1000	1000	0	0	57	南	0	0	0	0
18	南	4800	1500	1000	600	38	孫	5600	300	2000	1100	58	南	0	800	0	0
19	李	1400	600	0	0	39	南	3000	1000	0	0	59	南	0	900	0	0
20	南	3000	1300	1100	0	40	金	0	0	600	0	60	南	4400	4000	0	0
総計		132589	73368	78646	20950	平均		2174	1203	59%	29%	61	南	1600	1000	0	0

(稿を改めて論じる)と、その後桃李里の住民によって組織された「上桃水利契」の二つが存在するが、以下では後者を取り上げる。

ただし、「上桃水利契」は同一の水源をいくつかの村落がまたがって共同に利用するタイプでない。また、上記の両水利契も水源を一にするものではないことを前もってお断りしておきたい。

3. 「上桃水利契」の成立・展開過程

稲作農業を中心として営農してきた農村においては、農業用水の確保や管理が絶対不可欠な条件となる。韓国において農業用水を確保するための灌漑には、主として「堰堤」(河川を堰き止めた堤)・「ボ」(水路を利用した貯水施設)・「貯水池」の3つの形態がみらる。そして、農業用水の管理・利用は、たいがい村または蒙利民集團^{モンリ}によって共同で行われるケースが多い。言い換えれば、農村では農業用水を効率的に利用するために水利共同組織を結成しており、それゆえに水利共同組織は村の社会的統合をもたらすひとつの契機にもなっているものと想定される。

水利共同組織はその管理・運営の主体からすれば、①「土地改良組合」が主体となって水利施設を管理・運営する場合と、②農民が主体となって自ら自律的に管理・運営する場合とがある。後者は前者に比べ歴史的に古く、農民の自発的な水利共同組織をもっており、これを一般的に「スリゲ一」(水利契)と呼ぶ。

(1) 上桃水利契の成立過程

本章で取り上げる上桃水利契は弓坪の農民たちが、自ら溜池を築造し、その貯水池の水を共同利用・管理するために組織した水利共同組織である。1930年代後半に日本から導入された水利組合による水利共同利用の方式が、次第に弓坪に水田を所有する農民たちに影響をおよぼし、「上桃水利契」を組織化する気運として作用した。解放や6.25戦争の混乱期を経て、その後の政府の「灌漑改善事業」(1958)にも触発され、上桃水利契は1958年に結成されるに至った。蒙利住民の自らの手によって作られた溜池は村の名前に因んで村の上方に位置していたので「上^{サンド}桃貯水池」と命名され、その共同利用・管理組織である水利共同組織は

「上^{サンドスリゲ}桃水利契」と呼ばれることになる。上桃水利契は上述した灌漑形態のうち「貯水池」のタイプに属するものであり、管理・運営の主体からすれば、農民主体の自発的な水利共同組織であるといえる。

上桃水利契は1950年代末から40年間あまり当地域の水田耕作における農業用水の共同利用・管理を担ってきた。しかし、1980年代に大々的に行われた忠清道一帯の干拓事業により、とくに「大湖防潮堤事業」において1984年11月16日に竣工された7.8キロメートルの「大湖防潮堤」の完成とそれに伴う農業用水路の完備によって、上桃貯水池の存在意義は喪失し、1997年に解体してしまう。そこで、以下では「上桃水利契」の成立・展開・解体過程を中心に、当水利契の特異性を探ることにしたい。

上桃水利契は、「上桃貯水池」の蒙利住民によって組織された水利共同組織である。上桃貯水池はかつて桃李1里において最も広い水田地区である弓坪の中央よりやや上流に位置する溜池である(図1)。弓坪は、桃李里住民にとって最も重要な水田地区であったものの、上桃貯水池の完成以前は若干のしみ水や天水に依存する水田地帯であった。弓坪の土地所有住民たち(正確には上桃貯水池蒙利住民)の自発的な総意によって上桃貯水池は安定した農業用水を確保する目的のために築造された。彼らは自ら貯水池の用地を確保し、政府から堤防築造にかかる費用の補助を取り付け、1958年頃弓坪の現在地に溜池「上桃貯水池」を完成させた。もっとも政府の援助を取り付けたのは、一義的には農民自ら不安定な天水状態から抜け出し、水利面において安全な農地^農へ変えようとする意志と、弓坪農民の自立・自活精神にもとづく総意があったからである。加えて、地理的条件においても水源の確保や配水(給水)の面でも比較的条件にめぐまれた場所にあり、天水田が集中していたという要因も無視できない。上桃貯水池の位置決定には溜池用地の確保という問題もあるが、溜池の貯水量と蒙利区域の農地面積との相関関係が一層重要な要因として作用している。

1950年代末、当時の上桃貯水池築造工事は桃李里の住民のみならず、近隣村の住民も参加して、一人当たり決められた量の労力に対して労賃を払

う「ピョンテギ」といわれる日雇い労働によって行われた。当時の作業はトラクターなどといった重機はなく、スコップやクワなどを利用した人力に頼り、土石などの運搬には「ジゲ」（背負い子）による作業であった。

ところで、築造に先立って溜池用地の確保には数年の歳月を要した。また、確保された溜池用地の購入代金は一括払いではなく、5年ローンによって購入された。まず、必要となる溜池用地面積の購入契約を交わし、その代金は水田面積別ならびに水の所要量別に割り当てられ、蒙利住民は各自4～5年かけて、毎年収穫後の現物米をもって返済した。すなわち、面積5000坪あたり米一^{カニ}畝（米80kg）を基準として米を抛出し、4～5年かけて支払うというものであった。

上桃貯水池の完成とともに、貯水池の水を効率的に利用するために組織されたのが「上桃水利契」である。上桃水利契は1958年に「郡・面農地改良組合」に「上桃農地改良契」として登録された。しかし、上桃水利契は「郡・面農地改良組合」に登録されたといっても、農地改良組合の管理下におかれることはなく、その運営や管理などの一切は耕作者農民が主体的に行ってきた。

(2) 上桃水利契の展開過程

1958年当時から1986年までの上桃水利契の水田面積は計26137坪であり、契員は20名であった。

上桃水利契は共有財産として「溜池」9001㎡（2722坪）、堤防や用水路および水門を含む関連施設の用地などを含む「溝渠」367㎡（111坪）を共有していた。

上桃貯水池の完成とともに組織された上桃水利契は、当初、順風満帆の船出といえるような状況にはなかった。重装備機械のなかった1950年代末に桃李里の住民を含む隣村住民たちの人力によってつくられた上桃貯水池は、完成した翌年には堤防が決壊し、大々的な再工事を余儀なくされた。この工事は契員総出で行う「役事」（共同労働の賦役）で取り行われた。

このようにして完成された上桃貯水池は、以後総面積25000坪余りの水田の農業用水源として重要な位置を占めることになる。しかし、溜池2700坪あまりの上桃貯水池の貯水量は、当該水田の耕

作に十分な農業用水を供給することはできなかった。十分な水量を確保するにはさらに500～1000坪程が必要であるといわれる。こうした農業用水の不足を改善すべく、上桃水利契では毎年貯水池のすぐ上の田圃を借用する方策も行われた。これは今までなかった貯水池が新たに出来ることによって、貯水池すぐ上の田圃が貯水池の影響を受け、水はけが悪くなり、水が溜まりやすく、少々雨でも水浸しの状態となるためでもある。この田圃は以前のように苗床をこしらえることが出来なくなり、そうした浸水に対する補償として田の（これを貯水田と呼ぶ）所有者に「苗床浸水補償」が水利契から支払われた。

ところで、上桃水利契は上桃貯水池下流の水田所有農民から構成された小規模の水利組織で、とくに、彼らはこの水利組織を「家族的」と表現している。この言葉の意味は、上桃水利契が同じ集落の一部の農民が契員であるが故に水田面積や契員数が小規模であるという側面と同時に、契員間でお互いを熟知しているという状況をも意味している。さらに重要な点は、「上桃水利契」ならでは、水利契運営上の特異性を表す言葉であることに注目すべきである。要するに、「家族的である」という言葉の背後には、宗族マウルである桃李里（とくに桃李1里）の特質が反映、ないし投影されているものと考えられる。このことについては次章運営過程のなかで、より詳しく論及することにした。

4. 「上桃水利契」による水利慣行

—とくに運営過程をめぐる—

(I) 上桃水利契の規約

弓坪の農業用水を確保すべく上桃貯水池を築造し、その管理・利用を効率的に行うために共同で組織した上桃水利契は、初期の水利契規約を含む、水利契に関するすべての書類や帳簿（1960～84年）を喪失し現存はしていない。そのため、早急に水利契規約を作り直す必要に迫られ、1982年に水利契規約が再制定された。初期のものと大きく異なる点はつぎの二点に集約できる。ひとつは契員資格に関する条項であり、ふたつは役員構成に関する条項である。初期の契員資格は水利契内の土地所有者に限定されていたが、後の契約では耕

作者へと変更された。すなわち、所有者であっても耕作しない場合には水税^{みづのし}の対象とはならず、耕作者のみが水税支払いの対象となることと、役員構成が契長と総務という簡素な組織から契長・副契長・総務・理事（2名）・監事・水監というより複雑な組織へと変わった点である。

初期に作られた水利契規約の詳細な内容は現在資料が喪失したためにうかがい知ることができないが、1982年に新たに作られた「上桃水利契規約」は、第一章総則から第7章副則まで全7章からなっている。すなわち、第1章「総則」・第2章「事業」・第3章「役員（役員）」・第4章「総会」・第5章「役員会」・第6章「財政」・第7章「副則」である。

上桃水利契は、当該豪利地域における円滑な農業用水の供給と、円滑な運営を目的とし、契員資格に関しては現耕作者に限定している。契員の資格は、出資金の有無と水利契の経費拠出とも密接に関わっている。

上桃水利契では、当初は積立金としての一定額の出資金はなかった。しかし、1986年に、「郡・面農地改良組合」の勧告により、20万ウォン弱を積み立てることとなった。また、上桃水利契では積立金とは異なるが、予期せぬ出費に対処するために、白米5～6カマニを常に保持し、主として水利契施設の修繕に使われている。その米は毎年一定量を維持しており、もし減ることになれば次の年には補充する。さらに1987年に、水利施設の改・補修のための財源確保を目的とする「農地改良契管理規則第17条4項および第18条の規定」改正により、農地改良組合は貯水池に対して「農地改良契費」を徴収し、徴収された契費は「農地改良契管理規則第20条」に依拠して管理し、積立金は最小限度10a当たり粳5kg以上に相当する金額を積み立てなければならなくなった。そこで、当水利契では1987年から秋収穫後の買穀期間中に契費を徴収することにしている。

上桃水利契の運営においては契費を徴収し、貯水池の補償、水門や堤防・水路の修理等の契費に充てる。契費の徴収は、毎年耕作面積別に「ムルセ」（水税）という名で各契員に割り当てられる。契員資格で述べたように、水税徴収の対象となるのは、契員資格をもつ者、すなわち現時点上桃

貯水池から用水を引き水田耕作を行っている者である。要するに、当該地域内の水田所有者であっても、休耕する場合は水税徴収の対象からは除外され、さらに小作や賃貸した場合も所有者は対象から除外される。かわりに小作人や被賃貸者が水税対象者となる。

上桃水利契の役員（役員）構成をみると、前述のとおり当初は契長と総務各1名という非常に単純な組織体であったが、1982年に新たに制定された規約には契長・副契長・総務・監事・水監の各1名と理事2名をおく計7名の構成となっており、組織が強化されたことがうかがい知ることができる。上桃水利契の役員構成の強化は、1970年代末から80年代にかけて、契員の移動や小作関係の複雑化の深化などといった、様々な問題が発現したことに起因する。しかし、実際には副契長や監事はほとんど機能せず、主として契長や総務、そして理事と水監が主たる役割を担っている。1992年には、副契長職は理事へと替わり、有名無実であった監事職は廃止された。さらに、水利契の最も重要な役職の一つである「水門の開閉」などを行う水監（一般に「ムルガムドク」と呼ばれる）も1992年には、総務の役割に吸収され、水監職も廃止されるに至る。

1992年から1997年に水利契が解体するまでは、水利契の中核をなす役員構成は、ふたたび契長1名、総務1名、理事3名という単純化された組織体になる。すべての役員の任期は2年間であるが、多くの場合再任することが多い。したがって、役職は水利契の全メンバーが経験しているわけでない。とくに、契長は人望・人徳や信頼の厚い人物、門中における上位世代の人（長幼の序）、なかでも特に説得力を兼ね備えた人物に限られる傾向がみられる。契長の役割は水利契を代表し、定期総会や臨時総会および理事会を招集することである。総務の役割は水門の管理、会議の手配、帳簿の記載および管理・保管などである。理事は契長や総務とともに重要案件に関して一次審議を行う役割を担う。

役員の報酬についてみると、契長と理事には報酬がなく、総務のみ年間10000ウォンの手当が支給されたが、水監の役割を総務の役割として吸収した1992年からは年間の総務手当の支給額が

20000ウォンになった。しかし、総務手当が倍増したといってもその金額は僅かなものにすぎず、彼らの言葉を借りれば「飯代にもならない」金額である。

役員の権限についてもそれほど強くはない。このことは、既述したように上桃水利契が「家族的」であるといったこととも密接に関連している。すなわち、役員が強い権限を持ち、水利契の規則（契則）に則って厳しく取り締まることのできないという宗族マウルの特徴を示している。水利契の役員も契員もみな門中の成員であり、門中の論理が影響するからである。このことは当契のもっとも大きな特徴のひとつである。

上桃水利契の会議には「総会」と「理事会」があり、総会は年に1回、秋の収穫や後片付けが終わる12月末頃定期的に行われる「定期総会」と、緊急時に行われる「臨時総会」とに分けられる。総会は全契員が参集して行われるのに対して、理事会は水利契の重要案件が持ち上がったときに、契長・総務・理事が集まって審議を行う。総会が開かれる場所は主として総務宅であるが、なかには契長宅で開かれる場合もあり、また堤防の決壊や水門の故障などの時にはその現場で開かれることもある。

定期総会では運営費の予算・決算の審議、役員の選出、配水時期、関連施設の保全・修理、水税の拠出など、種々のことが話し合われる。臨時総会の典型的な契機は、主として旱魃による水不足に対する対処（後述）であるが、ここでは水利契の名義移転に関する臨時総会の事例を紹介しよう。

1985年3月15日に、臨時総会がマウル会館で開催された。参集者は役員らを含めて11名で、案件は「溜池特別措置法の所有権移転」による名義者選定に関するものであった。すなわち、「溜池特別措置法」の制定によって、それまで特定の個人の名義で登録されていた「上桃水利契の溜池所有権」が（法人格としての）共同名義に移転することが可能となった。それを受けて、当契では共同名義者となる代表者を選定するために臨時総会を召集した。総会の結果、貯水池の築造する以前の名義者であった特定個人（南基○）から水利契の法人格としての代表者である当時の契長（南○祐）、副契長（南○赫）および理事2名（南相○・南○松）

の計4名が選出され、この4名に名義移転が行われた。

この臨時総会で特筆すべきことは、通常であれば会議場所は概ね総務宅で開かれるが、この総会はマウル会館という村の公の場で開かれたことである⁵³。このことは、当総会で扱う案件が水利契の範疇を超えて、その影響がマウル全体に及ぶ問題であると考えられたためである。

ところで総会における決議は、満場一致の方法を採っている。また役員の選出、とくに契長や理事は契員の推薦によって全メンバーの同意を得て選出されるが、総務だけは契長の指名によって選出される。当時選出された役員は契長・南○祐、副契長・南○赫、理事・南○鉉・南相○、総務・南○栓、監事・南○松、水監・南○祐であった⁵⁴。

上桃水利契の財政、とくに共有財産である溜池の所有権に関する規定をみると、溜池は契員の共同所有であるが、その権利は個々人の所有面積に比例しており、この溜池の所有権は、後々当水利契が解体する際に重要な取り決め事項として作用することになる。

(2) 上桃水利契における共同労働と水税

年度の仕事始めは契長および水監（もしくは総務）が、前年秋の収穫以来放置されたままの貯水池や水路など関連水利施設全般を、春先に一斉に点検することから始まる。この点検によって主として疎水口補修、水路の浚渫や修理の有無、貯水池堤防の補修や池底の浚渫作業の有無などが判別される。補修を必要とする規模が小さければ、契員の労働力のみで、大規模ならば政府の補助を受け、契員全員の共同労働で行われる。とくに、こうした共同労働を「役事^{ヨクサ}」または「賦役^{フヨク}」と呼ぶ。

当水利契では、貯水池を築造した翌年に発生した堤防の決壊の時と、1970年代末頃に行った池底の掘削作業（浚渫作業）時に政府の補助を受け、大々的な共同労働の役事を行った。しかし、これら2回の役事を除けば、上桃水利契では役事と言うほどの共同労働はなく、せいぜい毎年春に行う水路の浚渫や補修作業があげられる。しかも、100メートルあまりの共有の水路が1985年以来セメント化するとともに、掃除は年1回ではなく、2～3年おきに1回行うことになった。共有水路以

外の水路掃除は、水田が接するところをそれぞれの耕作者が行うことになっている。

上桃水利契では1985年から貯水池の疎水口補修や水路掃除などの時には契員総出の共同労働で行うことを断念し、契員の中で都合の良い者が出て、賃労働で行うこととした。その背景には規約を守らない契員が続出し、不参加者に対する処罰に困り果てたという状況があり、その結果として編み出された方法である。こうしたやり方は崔在錫の指摘した契員総出で行う「役事」の共同とは異なるものであり¹⁰⁾、共同労働の変形といえよう。ここでは、崔在錫のいう契員総出で行う役事の共同労働を「役事型共同労働」と呼ぶことに対して、上桃水利契に特異の共同労働を「労賃型共同労働」と呼ぶことができよう。

「役事型共同労働」の場合は、要するに一般的に契員総出で決められた作業を一斉に共同で行うか、所有面積別に作業日数などの個別的に割り当てられた作業量を行うかの、二通りの方法がとられる。後者がより公平の原理が期せられていると言えようが、いずれにせよ、契員総出で行われる共同労働であることには変わりがない。また、役事型共同労働における不参加者には、「グオルメ」と呼ばれる出不足金（罰金）が課せられる。

一方「労賃型共同労働」とは、契員の中で都合の良い者が出て、決められた作業を参加者のみの作業で行うという共同労働であり、その労働に対しては契運営費の中から労賃という形で支払われる。したがって、労賃型共同労働を特徴とする上

桃水利契では、共同労働の不参加者に対して出不足金が課せられることはなく、参加者に対して水利契の経費から労賃が支払われるのである。1990年5月9日に契員のうち10名が出役し、水路補修作業を行った。その際の労賃は一人当たり日当10000ウォンであった。

ところが、例外的な例として1992年度の総会で「疎水口の木材除去作業を契員総出で1月5日に行うこと」にした。この作業の不参加者に対しては出不足金として日当2万ウォンを徴収するということとした。例年であれば、共同作業への不参加者に対して出不足金を徴収するのではなく、参加した者に対して労賃を支払うのであるが、この度は強いて役事型共同労働の形式をとったのである。この時以外は役事型共同労働の形式を適用したことはない。なぜならこの時の作業は大勢の労働力を必要とする作業であったことに加え、出役しようとする契員がほとんどいなかったからである。出役参加者が少ない要因としては、若年層の他出による契員たちの高齢化、出役労働に対する労賃の安さなどがあげられる。これに対して契員間の紐帯弛緩に対する戒めとして役事型共同労働の方式を取り入れたもの¹¹⁾と考えられる。その効果は絶大のものがああり、体面（世間体）を重んずる宗族マウルの習わしからすれば当然推測されることであって、実際罰金が支払われる事態は発生しなかった。

表3は、1984年度の「上桃水利契の耕作面積別・耕作者および水税」を示したものである。

表3 上桃水利契の耕作面積別耕作者および水税(1985)

耕作者	面積(坪)	水税(kg)	耕作者	面積(坪)	水税(kg)
南 ○松	557	5.6	南 ○鉉	1234	12.3
文 ○福	417	4.2	南 ○模	4385	43.9
孫 ○元	529	5.9	南 烈○	970	9.7
南 ○相	100	1.0	南 ○七	1343	13.4
南 ○君	580	5.8	南 ○孝	808	8.1
南 ○祐	1327	13.3	南 ○赫	3414	34.1
南 ○哲	860	8.6	南 統○	2386	23.9
南 穆○	400	4.0	金 ○教	450	4.5
南 ○烈	3492	34.9	金 ○東	152	1.5
南 基○	1723	17.2	南 ○興	1010	10.1
計				26137	262

表3によると、水税の名で呼ばれる水利利用料は、おおむね耕作面積100坪当たり白米1kgの割合で拠出する。もっとも、当水利契では経費を「契費」という名で拠出するのではなく、水利使用料として水税を拠出するのである。しかも、その水税は現在の耕作者（所有者であれ小作人であれ）に対して課せられるものである。

1988年からは、水税を現物（白米）徴収から現金徴収へと変更した。水税の現金化は桃李里における換金作物の盛んな導入（たとえばダレやコアリ唐辛子）とその脈絡を一にするものである。水税は従来通り耕作面積別に割り当てる。つまり、水税は耕作面積100坪当たり白米1.5kgの割合で、白米1kg 1050ウォンの算定で各契員から徴収した。また、1989年には白米1kg 1087ウォンに換算された。

(3) 上桃水利契における配水

上桃水利契の総面積は、道路や河川の整備に編入されたわずかな面積を除けば、その増減はほとんど変化がなかった。しかし契員は15～20名の範囲で年次によって変動している。それは契員資格が水田所有者ではなく、耕作者にあるからである。契員は固定されているのではなく、潜在的に毎年変わる可能性を秘めている。しかし、ほとんどの場合自分の土地は自作するので固定化しているように見えても、上桃水利契では特異な慣行（取り決め）として毎年耕作者としての資格を更新することになっている。近年になるにつれて高齢化や離村による貸借による耕作が増えつつあるので、契員数は若干流動的である。従来は契員数は相続分割による増減の他にはたいした変動もなく、耕作地を村外者に売買することもなかった。また、畑から水田への地目変更などによる新規加入者に対しても、入契に際しての特別な規則や慣行は認められない。新規入契は、その年の水税を支払うことで承認をうける。このことから契員の資格あるいは新規入契の規則が、比較的ゆるやかであることがうかがい知ることができる。言い換えれば、契員は毎年の耕作者によって更新されていくものであるといえる。また表1をみると所有者と耕作者の不一致が多いことがわかる。このことはかつては所有者が同時に耕作者であったも

のが、次第に所有者と耕作者が乖離していったことの反映でもある。

つぎに、上桃貯水池の配水時期についてみることにする。上桃貯水池の配水は年2回行われる。まず一回目は、4月15日前後の苗床をこしらえる時期に行われる。弓坪は昔からしみ水が沸き、苗床を設ける場として適していた。2回目は「ノンガリ」（田起こし）といわれる耕耘作業や、「ソレジル」または「ロータリー」といわれる代掻き直前、すなわち田植えの15日前ほどの5月10日前後に行われる。配水は貯水池の水門を開放して行われる。水門開閉の管理は、既述したように従来は水監の役目であったが、後に総務の役割に移管された。総務は総会で決められた配水期間中に水門を昼間のうちは開け、夜には閉める。洪水など降雨量が必要以上に多いときには側方を流れる排水路に流水する。

ところで、弓坪の水田は上桃貯水池の築造やいわゆる貯水田の借用など、農業用水の確保のための色々な措置や工夫が講じられた。にもかかわらず農業用水に関する心配が完全に解消されたわけではない。毎年平均して20～30パーセントの水田は依然として水不足が続いた。それ故に、配水をめぐって絶えず言い争いが起こったりもした。こうしたトラブルの多発は、役員人選において影響を与え、役員は公平かつ説得力をもつ人物が推挙される傾向がみられた。

弓坪の水田耕作における水不足は、1985年頃から苗床の集中化と畑から水田への地目変更により、一層拍車がかかった。こうした水不足を解消するためには、かつてしばしば行われた祈雨祭といった雨乞いの告祀^{コウサ}は行われず、現実的な対処法が講じられた。その対処法とは、「ゴアンジョン」（灌井）と呼ばれる井戸を掘ることであった⁹。前出した図2-aからも分かるように、灌井の位置は、溜池の位置から上の数ヶ所を除けば、下流の端に集中している⁹。溜池から遠いところに灌井が集中しているのは、根本的には溜池の貯水量が不足したからである。さらに、個人的に灌井が掘られ、しかも溜池から遠い下流の方に集中している。この主な要因は上桃水利契の「配水方法」（後述）と密接に関連している。すなわち、平等な配水が行われてこなかったことの証であり、後述するよう

に灌井を掘る以前は平等な配水をめぐっての諍いが繰り返された。

上桃水利契の農業用水の不足に対する対策には、既述したように溜池の貯水量確保のために貯水田を借り入れるという「共同的対策」もとられた。しかし、こうした共同的対策を講じたにもかかわらず、水不足は完全な解決には至らなかった。したがって、上桃水利契では水不足に対する共同責務を、部分的に個々人に押し付けるかたちがとられた。そうした方策のひとつが個人的に灌井を掘る（図2と図4）ということである。図2に示したAは南相〇（1980年代中頃）、Bは南基〇（1985）、Cは南〇善（1980年代中頃）、Dは南統〇（1995）、Eは南〇信（1989）、Fは韓〇烈（1989）、そして南端のひとつは金〇能（1985）の個人用灌井である。とくにEは近いDから引けば便利であろうが、灌井は基本的に個人用であるから地形を逆らってまでも遠い自分所有の田圃に水を引いているのがわかる。

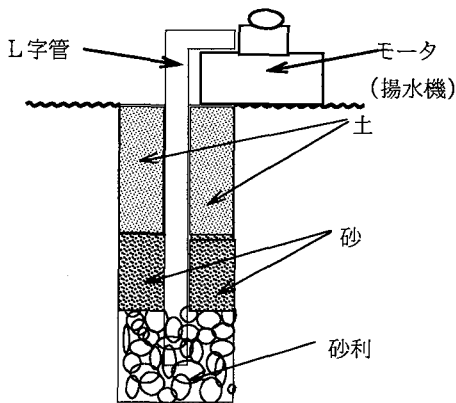


図4 ゴアンジョン（灌井）の模式図

つぎに、上桃水利契における非常時の配水方法について見ることにしよう。平常時の配水方法は傾斜を利用し、上の田から下の田へ順序よく配水を行う方法をとっている。しかし、日照りがひどい年には溜池の貯水量が少なく、その際は非常策の配水方法を講じなければならない。こうした時の代表的な非常策は、個々の田圃を半分に分け、まず半分ずつ給水を行い一巡した後、残りの半分に給水する方法である。この方法は貯水池の水をすべての契員が公平に利用するために、個々人の所有面積ごとに細分化し、給水の順序を決めて行

われるものである。この配水方法は「田割当制」⁹⁸と呼ばれ、こうした田割当制の配水を、とくに「分水」と呼ぶ。

崔在錫によると、分水方法の中でも田割当制による方法が「もっとも典型的な分水方法である」⁹⁹といわれる。このような分水は、契員の利害と直接関わる問題であり、臨時総会などで決められ、その決議に従って執行される。しかし、当水利契では非常時の平等な利用のために、配水方法を臨時総会で定めているにもかかわらず、しばしば執行過程でそうした取り決め違反する事態が起こる。その多くは、たとえば個人が勝手に夜間のうちに貯水池の水門を開けて自分の田圃に流水してしまうことである。こうした場合は、水利共同利用上の「公平の原理」が崩れて諍いが起こる。その際の窮極の解決方法は、「世間体」に訴えることであるが、当水利契ではそうした解決法をとることができず、契員は心中につねにわだかまりを抱くことになる。

水利共同利用上の公平の原理が保持されるためには、徹底して規則や取り決めを遵守する必要がある。しかし、当水利契においては下記に述べるような理由から、しばしばその公平性が崩れる。このことは他の水利契とは違って、当契における最も注目すべき特徴でもあると考えられる。とくに、こうした際に役員の器量・力量の発揮が期待されることになる¹⁰⁰。

まず、当水利契では各々水田のもつ特質に配慮がなされる点である。耕作していない休閑期の田について、乾燥している田は田植えまで乾いた状態のまま、水を張った田は水を張ったままの状態が良いとされる。当地の言葉を借りれば、乾燥した田は「日焼けにした方がイネの育ちも収穫も良い」とされ、乾燥したまま田植えの準備が始まるまで水を張らない。しかし、溜池のすぐ下のところなど滲み水・湧き水の出る田は休閑期であっても「一度水がはった状態から乾かしてしまうと、イネの育ちが良くない」といわれ、こうした水田には休閑期であっても給水する必要がある。当水利契においては、こうした旧来からの伝承的な知恵や慣行が規則や取り決めよりも優先されてしまう。それ故に、水利共同利用において機械的な実質的公平の原理が一步後退せざるを得ない結

果をもたらす。

もうひとつの要因は、いわゆる「盗水」におけるやりとりである。これは水利用における規則違反者に対する処罰のあり方とも関連する問題である。例えば、長期の日照りなどで水不足の際の非常策として「田割当制」分水時にしばしば盗水が行われる。「田割当制」分水の場合は、先番となった田に先ず給水し、後番となった田は先番の田が一巡するまで待たなければならない。田割当制分水のルールは、先番の田が一巡するまで後番の田は、順番を守るのが当然である。にもかかわらず、当水利契では典型的な盗水の例として、個人的に夜の間に先番の田の水を後番の田へ、畦などを切り崩して流し入れるという事態がおこる。翌日になって、「先番の田の水が干上がったから給水してくれ」といったクレームをめぐって諍いがおこる。当水利契では、こうした際のルール違反者に対する処置が曖昧で、問題の原因究明や責任追究が徹底的に行われず、主として個人の良心に委ねられる傾向がある。規則違反者に対する処罰や処置は、水利契規則にも記載されておらず、「温情主義的な処置」がとられるのが常である。したがって、こうした水利契の共同利用における公平性の欠如は、契員間のしこりを残しかねない。

水利秩序の保持や規則違反者に対する処罰や処置は、きわめて微妙かつ困難な問題である。それは、ひとつに配水および水利施設の管理に関する権限の所在の問題でもある⁽³³⁾。

上桃水利契では特定の人にその権限を委ね、取り締まるという方法よりは、むしろ権限や責任の所在が総会に委ねられている。さらに、規則違反者に対する処罰や処置は規則に則るものではなく、違反者自身の良心や「社会的体面（面目）」に訴える方法をとるからである。こうした背景には宗族マウルの特殊事情が反映しているといえるだろう。

5. 「上桃水利契」の解体

上桃水利契の蒙利地域を含む弓坪全域は、「大湖防潮堤事業」（1981.4～1995）によって淡水化され、大規模農業用水路が整備され完成をみた。さらに、弓坪全域は「大湖防潮堤事業」の「大規模農業総合開発計画」⁹⁴の一環として、図2-bに示

したように1996年春から1997年春に耕地整理が行われた。この結果、上桃貯水池は水田として編入されることになり、上桃水利契はその存在目的を喪失するに至った。

上桃水利契では、当契の解体に向けて二つの会議がもたれた。ひとつは、1999年1月11日に役員らが集まって開かれた理事会である。この理事会には契長・総務・理事各の3名と、その他契員1名を含めて計6名が参集し、契長宅で行われた。その時の案件を整理すると、下記の通りである。

- | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 一、会議日時 1999. 1. 11
一、上桃水利契の溜池・溝渠に関する地分確定の件
一、南基○関係溜池所有面積確定の件
一、南○祐・南相○土地売買による地分所有権の件
一、南○○の田整理の件
一、その他 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

上述の案件のうち、「南基○関係溜池所有面積確定の件」に関しては会議が終わった後、土地台帳の地籍図を確認することが申し合われた。また、「南○祐・南相○土地売買による地分所有権の件」に関しては、上桃水利契の規約通り、現所有者に権利があるということが確認された。さらに、「南○○の田整理の件」については、水利契に編入されていた南○○の農地40坪に対して、坪当たり12000ウォンを支払うことが話し合われた。このように、総会にかける前に、主だった役員らが集まって水利契の解体に向けての準備作業として、重要案件が提起・審議された。

この理事会による一次審議が行われてから8日後、上桃水利契の全契員が参集し、臨時総会が開かれた。その詳細は下記表4の通りである。

この臨時総会を最後に40年あまり続いた上桃水利契は、その歴史に幕を下ろすことになった。上桃水利契の最後の臨時総会は、1999年1月19日に総務宅で開かれた。この会議ではおおむね事前に開かれた理事会で審議した諸問題が再び議論され、最終的に承認された。

上記に示したように、上桃水利契の最終会議である臨時総会では、とくに契内の所有者別土地の

移動事項に関して、土地台帳による追跡調査および地分の確定作業などが行われた。これらの作業は、耕地整理に伴って水利契共有の溜池が水田として編入されることとなり、耕地整理における「換地問題」と密接にかかわってくる。溜池は弓坪土地所有者全員に、坪当たり10000ウォンという価格で売却される。溜池売却金は水利契契員それぞれ（15名）に、土地所有面積に応じて配分された。また、当会議では水利契の功労者である里長や総務に対して表彰も行われた。こうして上桃水利契は、水利契共有財産の売却金を個人別に分配することで、最終的な作業を終え、解体することになる。

一方、当水利契の契員同士が、総会以外の機会に親睦などの目的で自発的に集まることはこれまでほとんどなかった。しかし、多くの契員から、水利契の解体を際して「ヘポラダブルザ」（今までの感情のもつれをほぐそうじゃないか）という意見が出され、一緒に旅行に行く計画を立てた。ところが、会議が長びき、遠出は出来ず面所在地で飲食を共にすることで終わる。この共食会をもって上桃水利契は解体し、再び参集することはなかった。

上桃水利契の解体後の弓坪全域は、大湖防潮堤事業によって耕地整理とともに大規模用水路が完備された。上桃水利契解体後、弓坪水田は1997年から、「農漁村振興公社」の管理下に入る。当振興公社の水税は、1平方メートル当たり6ウォン（坪当たり19ウォン）である。当地域における農業用

水の心配は完全に解消され、農民からは「水の心配もなくなり、各自が必要なとき必要な分、気兼ねなく利用できるようになった」というよろこびの声も聞かれる。米の収穫量が2から3割減少したことよりも、用水の心配がなくなったことや耕地整理によって一筆当たりの耕地が拡大したために機械化耕作が可能になったこともあり、過疎高齢化の進行しつつあるこの地域では大きな利点といえる。

むすびにかえて

本論では、水利契の成立から解体までの歴史的プロセスとともに宗族マウルにおける門中と村との関係の一端を明らかにするために、水利共同組織を取り上げた。

水利共同組織を通して見る限り、村における共同性が希薄であることが顕著な特質であるといえるだろう。伝統的に共同利用組織をつくるというよりは、個人個人が個別に問題を解決することが共同性よりも優先されてきたことが上述した事例からみてとることができる。すなわち、水利共同組織は戦後日本人による水利組合の導入に影響され、戦後村内に組織されたとはいえ、用水確保の際におけるプガンや灌井による対処法はまさにこうした共同性の希薄さの象徴といえる。

一方、宗族マウルを本拠地としながらも門中は村を超えて組織され展開される。しかし、門中の原理である「長幼の序」は水利契運営における温情的処理策は公平の原理を制約する一方で、成員

表4. 臨時総会会議録（1999年1月19日）

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 上桃水利契所有溜池・溝渠に関する地分確定の件
イ.南基○所有240-2畓（田）所在493平方メートルは個人所有
242-5田（畑）所在613平方メートルは水利契所有
ロ.南相○所有2096平方メートルに関しては該当なし
ハ.南基○所有2096平方メートル（桑畑）は該当なし
2. 上桃水利契共同所有地道路編入用地補償金精算の件
イ.南基○17平方メートル分（1平方メートル当たり4900ウォン）
83100ウォン水利契へ返金
3. 南基○260平方メートル所有権移転による精算の件
4. 南○○所有畓（田）40坪水利契売買精算の件
5. その他、表彰の件 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

間のわだかまりを温存し、かつ増幅させる。最終の水利契総会における発言（「ヘポラドプルザ」）はまさしくこうした状況を如実に象徴している。

また、父系出自集団（門中）の紐帯に関するキーリングの「分節同士の関係は、父系出自のハイアラキーに沿って想定されている」という論理や、サーリンズがいう父系出自集団における「相補的対立、もしくは結集効果」⁽³⁵⁾といった様態は、当地では成立せず、堂内を基軸とするチバンは土地開発や経済活動においてむしろ個別的展開をみせる。このことは、門中の機能が本来的に先祖の祭祀にあり、経済活動などはそれに従属されるからである。

それゆえに、上桃水利契に象徴されるように、マウルにおける共同性は外部条件さえ整えば容易に解体してしまうこととなる。したがって、本論で論じた事例にみられるように村における共同性あるいは領域統括は日本と対比した場合に、とくに弱いものになっていると言わざるを得ない。

謝辞

本研究は文部省科学研究費補助金（国際学術研究）「日本・中国・韓国現代社会の基礎構造に関する実証的比較研究（研究代表者：矢野敬生、研究課題No:09044040、1997-1999）」と早稲田大学の「特定課題研究（林在圭課題No.99A-8991999）」による助成の一環として行なわれたものである。

なお、本研究に際しては、桃李里の方々に大変お世話になった。とくに、里長の南基赫氏、大宗家の南宙鉉氏、上桃水利契長の南統祐氏に対しては、お礼の言葉の申し上げようもない。

註

- (1) 宗族という用語に関しては議論が多く、統一されていない。研究者によって「氏族」（金宅圭）、「宗族」（金斗憲・李光奎）、「同族」（崔在錫）などが使われる。しかし本稿では「宗族」という用語を用いることとするが、それは「本貫祖（始祖）」を頂点とするその子孫全体の範囲を指すものと規定しておく。また、「マウル」というのは、おおよそ日本語の「村」に照応する。
- (2) 崔泰鎮、1966「1920年代における日本帝国

主義の産米増殖計画の掠奪的本質」『朝鮮学術通報3-1』。西條晃、1971「1920年代朝鮮における水利組合反対運動」『朝鮮史研究会論文集8』。堀和生、1976「日本帝国主義の朝鮮における農業政策」『日本史研究171』。林炳潤、1981「産米増殖計画—その推進主体の性格規定を中心に—」『日帝の韓国植民地統治』正音社（韓国語）。田剛秀、1984「日帝下水利組合事業が地主制展開に及ぼす影響」『経済史学8』（韓国語）。李愛淑、1985「日帝下水利組合の設立と運営」『韓国史研究50・51』（韓国語）。河合和男、1986『朝鮮における産米増殖計画』未来社。松本武祝、1991『植民地期朝鮮の水利組合事業』未来社。李榮薫・張矢遠・宮嶋博史・松本武祝1992『近代朝鮮水利組合研究』一潮閣など。

- (3) Keesing R.M., 1975 'Kin Groups and Social Structure' (New York: Holt, Rinehart and Winston)の和訳本である『親族集団と社会構造』（1982）R.M.キーリング著、小川正恭・笹原政治・河合利光訳、未来社。
- (4) Sahlins, Marshall D. 1961 'The Segmentary Lineage: An Organization of Predatory Expansion, in Anthropologist, vol.63:322-343' 向井元子訳「分節リネージュ—侵略的領域拡張の組織」1982『社会人類学リーディングスⅠ』アカデミア出版会。
- (5) 調査経緯と手法については、柿崎京一他1997「韓国忠清南道の両班村桃李里における文化と社会（その1）—村落悉皆調査の手法と経緯—」『人間科学研究』第10巻第1号、早稲田大学人間科学部参照。桃李里の門中については、林在圭1998「韓国における「門中」の構造と機能—忠清南道宜寧南氏忠壯公派門中を中心に—」『村落社会研究』通巻9号日本村落研究学会、および金一鐵他1998『宗族マウルの伝統と変化』白山書堂を参照されたい。
- (6) 賜牌とは国から功臣などに奴婢・山林・田畑などを授けることで、南以興將軍は大湖芝面（現在41村）と隣接する貞美面（現在79村）の半分を授けられた。記念館に保管されている登記簿謄本である「賜牌節目」（1856）によると、13の村が含まれている。

- (7) 宗家とは、代々長男（父系嫡男）系の家であり、その当主を宗孫とよぶ。とくに、支派または堂内の長男系の宗家と区別するために、始祖（派祖）からの代々長男系を大宗家という。宗家は日本の本家に照応する。
- (8) 両班（ヤンバン）は、朝鮮時代において官僚を輩出することができた最上級身分の支配階級である。元来の意味は、国家の公的な会合における二列の並びのことであり、東班（文官）と西班（武官）を意味する。
- (9) 李春寧1989『韓国農学史』民音社、57頁。
- (10) 大湖芝面の面誌によると中本総之郎となっているが、住民によると片原は当該地域の管理者であり、中本が実際の工事主であったという。
- (11) ハングル学会、1974『韓国地名総覧4』（忠南編）、248頁。現在は新洞干潟地または干潟地と呼ばれる。
- (12) 桃李里の一部・サルコジ（箭洞）などは1980年代まで海に接していたが、1981年4月16日に始まり1985年9月30日に竣工された大湖防潮堤工事によって内陸と化し、かつて半農半漁村としての桃李里は完全に農村マウルへと変貌してしまった。
- (13) 当地名の由来は、当時干拓事業の際に、堤防を築造するために船着場として物資を輸送したところであったことからその名が付けられたといわれる（大湖芝面『我が故場大湖芝』1984：19）。
- (14) 弓は武官であった祖先のシンボルであり、今日立派な弓道場が建てられている。
- (15) チバンとは、門中のサブリネージの一種である。高祖（現当主から遡って4代上の祖先）を頂点とする子孫の集団を「堂内」といい、この堂内と必ずしもその範囲が一致しないが、当門中においてはほぼ一致している。チバンの上位セグメントは小宗である。
- (16) 位土とは先祖の祭祀の費用を賄うために設けられている共有地のことである。
- (17) 李春寧1989『韓国農学史』民音社、57頁。
- (18) こうした所有権と耕作権の分離現象は、後々の農地改革の導因にもなったものと思われる。すなわち、戦後の農地改革は所有と耕作権の
- 極端な分離（過大な小作料の搾取）による反動として行われ、所有権と耕作権の統合が図られた。
- (19) 例えば、宗孫のオジ達（G+1世代）に農業や土地について問うてもほとんど具体的な返答を得ることができない。
- (20) 告祀は韓国では、元来旧暦10月に家内の安寧を願って家神（屋敷神）を祀る儀礼であった。その時の供物としては主として餅と酒と明太、豚の頭をささげ、盛大に行う場合は僧侶を呼ぶが、大概是巫女によってとり行われる。この際供物の告祀餅は近所と分けて食べるのが慣例である。告祀を行う目的は、祈子・育児祈願、治病、成婚、家屋新築、引っ越し、除厄、幸運、海上安全、豊漁、喪家浄化、亡人・溺死者薦度などの祭儀といった広範にわたっている。告祀の大規模のものが、クツと呼ばれるものである。クツは神（自然神）に祭物を供え、歌と踊りで吉凶禍福等の人間の運命を調節してもらうために祈願する祭儀である。ところで祈雨祭は後述する上桃貯水池の築造前まで、里長や長老を中心に高山に登り行われたという。唐津郡内でギウゼが行われる山として、よく知られているのは「イベ山」と「ジルミ山」（147m）の2ヶ所である。とくにイベ山は、高さが海拔243メートルの山で、尾根の形状がイムギ（黒龍：龍は水をつかさどる水神である）に似ているため、旱災があるとき、ここに豚の頭を供えてギウゼをあげた後、その豚の頭を山の麓にある龍澤へ転がし落とし入れると、雨が降ると信じられている。
- (21) カマニ（吠）とは、藁で編んだ穀物の入れ物のことであり、と同時に穀物の量を表す単位として用いられる。日本語の俵に照応する。
- (22) Keesing R.M., 1975 'Kin Groups and Social Structure' (New York: Holt, Rinehart and Winston) (『親族集団と社会構造』(1982) R.M.キーシング著、小川正恭・笹原政治・河合利光訳、未来社90頁) から引用した。
- (23) 蒙利民集団とは受益者集団の意味である。とくに、蒙利とは「恩恵を受ける」という意味

で、主として水利の共同利用に限って使用する傾向がある。

- ㉔ 水利安全農地とは、農業用水の確保に全く心配のない農地であるという意の、韓国行政上の用語であり、広く一般的に使われている。
- ㉕ 会議が開かれる場所は概ね総務宅が多く、なかには契長宅や、稀には貯水池の堤防などの現場でも開かれる。
- ㉖ 1985年以降の歴代契長は南統祐（1985～86）、南基赫（1987～89）、南基信（1990～94）、南統祐（1995～1998）であった。とくに、南統祐氏は「祐」の輩行字であり、「基」の輩行字の世代より上位世代であり、他姓からも信用が厚く、桃李里のもう一つの水利契の契長でもある。南基赫氏は現職の里長である。
- ㉗ 崔在錫、1975『韓国農村社会研究』一志社、365頁。
- ㉘ ゴアンジョン（灌井）は個人的に掘り、地下水を個別的に利用するものである。これらのゴアンジョンは1980年代初め頃、政府の補助金を取り付け、個別的に掘られた。
- ㉙ 溜池からそう遠くないところに1つのゴアンジョン（灌井）が存在しているが、それはその周辺がかつては水田ではなく、畑であったために上桃貯水池の水を利用せず、灌井を利用したからである。それらの畑は蒙利区域には含まれていない。
- ㉚ 上から下へと順番に配水を行うと10日あまりのズレが生じるので、収穫に大きな影響を与える。したがって下に水田をもつ人が異議をとなえ、今年は下から（チダツイ）をしようとする。
- ㉛ 崔在錫1975：370頁。
- ㉜ このことは一見すると、役員の権限が強大であるかに見受けられるが、実は役員には問題解決の根本的な処置を執ることが求められるのではなく、問題が発生してから仲裁役としての器量が期待される。
- ㉝ 水利施設に異常が生じ補修や浚渫作業が必要なときは総会を召集し賦役を行う。些細なことはムルガムドク（かつては監考と呼ばれていた）が巡廻しながら手入れをし、盗水を監視する。都監（かつては契長のことを都監と

呼ばれていた）と監考はもちろん重要な事柄に関しては総会の決議に従って執行されるが、日常の水利施設の管理に関してはもっぱら全権を賦与されているといえる。

- ㉞ 忠清南道の大々的な干拓事業である大規模農業総合開発計画といわれるが、その中身は工業化政策が主となっており、農業は二の次になっている。なお、当地域における大規模農業総合開発計画および耕地整理に関しては稿を改めて論述する予定である。
- ㉟ Sahlins, Marshall D. 1961 'The Segmentary Lineage: An Organization of Predatory Expansion, in Anthropologist, vol. 63: 322-343、向井元子訳「分節リネージ侵略的領域拡張の組織」1982『社会人類学リーディングスⅠ』アカデミア出版会186～188頁。サーリンズのいう父系出自集団における「相補的対立または結集効果」を整理するとこうである。ティヴやヌエルでは、分節的有効性は相補的対立というかたちで具体化する。つまり、等位の諸分節が防衛や自分たちの特権を拡張する目的で結集する。等位の一次分節に属する個人間の紛争は、それぞれの一次集団をひとまとめにして争いの場へと引きずり出すこととなり、こうして分節間の争いが展開する。同じ論理によって、つまり分節的友好性の論理によって、小リネージ、大リネージ、そしてそれ以上の諸リネージが相争うことになる。このようにして分節リネージ体系は、政治機械として作用する。こうした相補的対立はヌエルやティヴに特有なものではない。

参考・引用文献

- 崔在錫1975『韓国農村社会研究』一志社（韓国語）
- 崔泰鎮1966「1920年代における日本帝国主義の産米増殖計画の掠奪的本質」『朝鮮学術通報3-1』
- ハングル学会1974『韓国地名総覧4』（韓国語）
- 堀和生1976「日本帝国主義の朝鮮における農業政策」『日本史研究171』
- 田剛秀1984「日帝下水利組合事業が地主制展開に及ぼす影響」『経済史学8』（韓国語）

- 柿崎京一・矢野敬生他1998「韓国忠清南道同族村の社会・文化変動に関する実証的研究」『青丘学術論集』第13集、財団法人韓国文化研究振興財団
- 河合和男1986『朝鮮における産米増殖計画』未来社
- Keesing,R.M.1975 'Kin Groups and Social Structure'NewYork:Holt,Rinehart and Wins ton,『親族集団と社会構造』(1982) 小川正恭・笹原政治・河合利光訳、未来社
- 金一鐵他1998『宗族マウルの伝統と変化』白山書堂(韓国語)
- 李愛淑1985「日帝下水利組合の設立と運営」『韓国史研究50・51』(韓国語)
- 李栄薫・張矢遠・宮嶋博史・松本武祝1992『近代朝鮮水利組合研究』一潮閣
- 李春寧1989『韓国農学史』民音社(韓国語)
- 林炳潤1981「産米増殖計画—その推進主体の性格規定を中心に—」『日帝の韓国植民地統治』正音社(韓国語)
- 林在圭1998「韓国における「門中」の構造と機能—忠清南道宜寧南氏忠壮公派門中を中心に—」『村落社会研究』通巻9号、日本村落研究学会
- 松本武祝1991『植民地期朝鮮の水利組合事業』未来社
- 西條晃1971「1920年代朝鮮における水利組合反対運動」『朝鮮史研究会論文集8』
- 大澤幸一郎・矢野敬生1999「水利秩序における村の「領域」統括—八ヶ岳南麓村の事例」『ヒューマンサイエンス』Vol.11-2早稲田大学人間総合研究センター
- Sahlins,M. D.1961 'The Segmentary Lineage:An Organization of Predatory Expansion, in Anthropologist, vol.63:322-343'向井元子訳「分節リネージュ—侵略的領域拡張の組織」1982『社会人類学リーディングスⅠ』アカデミア出版会
- 矢野敬生・林在圭他1997「韓国忠清南道の兩班村桃李里における文化と社会(その1) —村落悉皆調査の手法と経緯」『人間科学